

Title	討論
Author(s)	
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 139-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27062
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

討 論

司会(宇野田) どうもありがとうございました。それでは、報告者のお二人から答えられる範囲でお答えいただいて、議論を全体に開いていくことにしましょうか。

鳥羽 コメントありがとうございました。まずは徐さんのほうからお答えしたいと思います。共通性もあった『希望』と『われらの詩』の最大の違いは、担い手だと思います。『われらの詩』は、職場サークル、地域サークル、療養所サークルなど、働く仲間たちのつながりなどを基盤としてできたサークルですが、『希望』のほうは、旧制高校や大学といった、高等教育を受けているエリートたちの運動でした。そのような担い手の違いは、雑誌の内容の面での性格の違いにも現れていたということになります。

雑誌の性格の重層性については、コマストリさんからの質問とあわせてお答えできればと思いますが、フランス語がよく使われているというのは、それまでのドイツ語中心の旧制高校の雰囲気に対して、フランス文学への憧れも当時あったかと思います。ギリシャ神話についても、当時の旧制高校や大学の人たちは、共通の教養を持っていたと思います。

それから、イニシエーションではなくカタルシス、というのも、おもしろいご指摘ですね。リセットされることによって新しいことが始められる、というふうに、たしかに読めると思います。『希望』という雑誌にはそのような志向があるのかなと、ご指摘を伺いながら思いました。

川口 コメントありがとうございました。まずは徐さんのほうからお答えしますと、「原爆投下は、第二次世界大戦の最後の軍事行動というよりも、ソ連との冷たい外交戦に対する最初の大作戦の一つであった」というような意識が『われらの詩』にあったかどうか。ということなわけですが、簡単に言ってしまうと、あったと思います。みんながそれを共有していたかどうかはわかりませんが、第16号(1952年9月)に掲載された「子供の詩は教える—原爆の詩を選衡して—」で、峠三吉は、いろいろな人の言葉を引用したあと、「これらの言葉は、平和のために使われたという原爆の正体が、実はアメリカにとつて世界せいはいのための次の相手であるソヴェートに対する第一の威嚇、制先攻撃であり、そのために将来必要となる日本に対して権力を確立する何よりの手段であつたという真相の一端を明瞭に示して」いると述べていて(3頁)、すくなくとも峠はそのようなもの見方

討論

を提示しています。

コマストリさんからの質問で、朝鮮戦争期の広島・長崎の証言集や原爆文学について『われらの詩』と同じようなことが言えるのか、という質問がありました。この点は媒体によってさまざまに違いが現れてくると思います。ただ、たとえば子供の作文や詩を集めた長田新編『原爆の子』（1951年）や峠三吉編『原子雲の下より』（1952年）は、たしかに朝鮮戦争という文脈を共有していたと思います。

1953年に朝鮮戦争が休戦になったあとどうなったかという点については急にはお答えしにくいのですが、たとえば、「一九五三年の実態」という副題をもって1955年に刊行された『夕風の街と人と』で、大田洋子は、急速に忘れられていく風景を捉えようとしているように思います。そして、それと同時に大田洋子の評価も落ちていくというようなメカニズムがあるのではないかなと思っています。

『原爆の子』をもとにして撮られた作品として映画『ひろしま』（1953年）がありますが、その最後のほうに、おじさんの工場で働き始めた青年がまもなく辞めてしまう、元担任の先生がなぜ辞めたのか問い質すと、朝鮮半島で使われる砲弾を作る仕事なんかしたくないと答える、というシーンが出てきます。「朝鮮特需」のもとでの「復興」を問う、この映画後半の重要なシーンですが、このようなかたちでも、当時朝鮮戦争の問題はかなり幅広く共有されていたと言ってよいと思います。

司会(宇野田) コマストリさんから出された問いとして、50年代の経験はその後どうなっていたのか、という問いがあったように思います。山代巴の場合は、50年代に『原爆に生きて』をまとめた経験がひとつの原点となって60年代の『この世界の片隅で』につながっていく、ということがあるわけですが、『われらの詩』や『希望』の場合はどうだったのか、ということですね。

川口 復刻版の解説で触れたのですが、深川宗俊さんという歌人がいます。彼は、60年代の終わりぐらいから、三菱に連れて来られた朝鮮人の元徴用工の支援を始めます。僕は50年代の経験が直接ここにつながっているとは思わないのだけれども、70年前後に50年代の経験の捉えなおしがなされて、かつて強制連行された人々の支援を始める。その結果、深川さんの最後の歌集ではこのことにかかわる歌がかなりのウエイトを占めることになる。彼のなかでは50年代の経験がつねに捉えなおされる事柄としてあったのではないかと思います。

もう一人例を挙げるとすると、医師としては「丸屋博」という名前で知られている詩人の御庄博実さんがおられます。御庄さんの場合も、ある時点から在韓被爆者支援に関わっていかれ、その経験を詩として書いていかれる。朝鮮戦争期に『われらの詩』に関わった方々のなかでは、朝鮮戦争期の経験がその後くりかえし捉えなおされていくということが

討論

しばしばあったように思います。

鳥羽 『希望』の主宰者河本英三は、その後アメリカに渡ってニューヨークの大学でマーケティングの勉強をしたのち、日本ではじめての国際市場調査会社IRMを起こし、近年までニューヨークの現地法人と東京本社の社長を務めていました（2010年没）。また日本の文化やビジネスをテレビを通してアメリカに伝える「Let's Learn Japanese」という国際交流基金の番組を大赤字ながら最後まで続けたということで、日本とアメリカの橋渡しをするような仕事をされたようです。

当時も高良真木がアメリカに留学してクエーカー教徒の大学に行くという不思議なことをやっているのですが、原爆後のアメリカとの協働というか、そちらに自分の拠点をすえていこうという方向性が『希望』の中にはあって、主宰者はそちらの方向に進んだのかなと思います。

それからまた、木島始、原誠、小海永二、黒羽英二、渡邊澄子、古谷鏡子、竹内泰宏、高良留美子といった人たちは、文化運動、芸術運動にその後も関わり続けますので、国内でこの運動を継承した人々と、アメリカに渡っていった人々との二つの流れになっていると思います。

司会(宇野田) もう一点、『希望』について確認させてください。『希望』は、加藤周一ら戦後のリベラルな知識人がサポートしている一方で、野間宏、安部公房、石母田正ら共産党主流派系の文化運動の中心だった人たちもかなりバックアップしていますよね。後者の人々と『希望』との関係は、どんな感じだったのでしょうか。

鳥羽 加藤周一は、かなり早い段階、広島版のころからサポートし始めているのですが、野間宏や安部公房は東京版になってからです。やはり東大教養部に拠点を置いた後輩の雑誌ということでの協力ではなかったかと勝手に想像しています。詳しい事情はわかりませんが、東大周辺の人たちが党派を問わずかなりサポートしたのではなかったかと思います。

司会(宇野田) それではフロアからどうぞ。

道場親信 川口さんがお話しになった在日の人々と広島運動との関わりに関する資料としては、たとえば「森瀧日記」(中国新聞社編『ヒロシマ四十年—森瀧日記の証言』平凡社、1985年)がありますね。1954年に原水爆禁止広島大会が開かれた際には、全日自労の朝鮮人女性たちが参加していたと森瀧さんは書いている。でも、55年の世界大会になると、そのような人々に関する記述はなくなります。55年の8月になると、民族組織も路線転換していますし、六全協の直後だということもあって、左翼の運動も方針転換している。川口さんの論点と関わっていると、50～51年と52年以後の断絶よりも、54年と55年の断絶のほうが重要なのではないかと思います。

それから、コマストリさんの提起された論点と関わることですが、冷戦下のヨーロッパ

討論

の場合、イタリアやフランスでは共産党が相対的に強かったのに対し、ギリシャやトルコでは非常に暴力的な支配体制が築かれたという問題も考える必要があると思います。映画でいえばアンゲロプロスの世界ということになりますが、たとえば韓国とギリシャを冷戦下の西側前哨国家として比較してみるような視点も必要なのではないでしょうか。

もうひとつ。イタリア共産党は、スターリン批判の直後に「社会主義へのイタリアの道」を採用して、構造改革路線をとりますよね。この時期には、日本でも一部で構造改革論が受け入れられて、マルクス主義のなかでも分岐が起こっていきます。50年代における文化運動の展開について考えるにあたって、そういう新しい左翼、新しい文化理論を視野に入れていくと、おもしろくなるのではないかと思います。

竹内栄美子 川口さんがご報告の最後で「東アジアの光景の広がり」に広島を置きなおす想像力ということをおっしゃっておられましたが、私もそれはとても大切な観点だと思います。そのうえで、川口さんは、「墓標」には登場した「朝鮮のお友だち」が「一九五〇年の八月六日」では背景に退いてしまうことにはどのような意味があるのだろうか、という問いをお立てになったわけですが、さきほど道場さんもお指摘なされた通り、運動の路線転換が起こるのはもう少しあとのことですよ。そうするとここからはどういう意味を読み取ったらいいのか。あるいは、そもそもここから何か意味を読み取ることは適切なものか、ということにもなるかと思いますが。

川口 1950年8月6日の広島における反米反戦の闘いについては、のちに繰り返し語られていくことになるんですが、そこには朝鮮人の活動家は登場しないんですね。そのことが念頭にあるから、「背景に退く」という表現を使ったんですが、適切な表現であったかどうかわかりません。峠にとっては朝鮮人がいるのは当たり前のことであったからわざわざ書き込まなかったのかもしれないし、逆に何らかの政治的配慮が働いてあえて書き込まなかったのかもしれない。運動史上の事実関係も、道場さんのお指摘の通りだと思います。むしろ問題は、朝鮮人の存在が後世の証言記録のなかで語られないままになっている、「一九五〇年の八月六日」もそういう文脈で繰り返し参照されてきた、ということなのだろうと思っています。広島の場合、運動の正統性の問題などとも関わって、当時誰が担い手であったのかということがとくに見えにくくなっているという特殊事情もあるように感じます。この点はもう少しきちんと整理しないとはっきりしたことは言えないのですが…。

申知瑛 趣旨説明のうち、とくに第3節の問題提起には共感するところが大きかったのですが、この論点は、下手をすると、日本だけが特殊だったという話になってしまう可能性がありますよね。そうならないためにどうしたらいいかということを考えてみたのですが、その方法の一つは、アメリカという要因をきちんと議論に組み込むことだろう

討論

と思います。徐さんが紹介してくれた韓国の冷戦文化研究でも、一つの大きな流れになっているのはアメリカナイゼーションをめぐる研究なのですが、そのあたりについてはいかがですか。

司会(宇野田) 趣旨説明のなかで、戦後日本の文化運動、とくに50年代の文化運動について考える際に、東アジアという広がりの中で考えるという視座と、西ヨーロッパとの対比で考えるという視座とを提起したわけですが、アメリカという要因がもう一つの重要な視座としてあることは言うまでもありません。今回のセッションではその面での問題構成がすっぽり抜け落ちてきているというのは、ご指摘の通りですね。報告者のお二人、アメリカ要因という観点から一言ずついただけますか。

鳥羽 『希望』では、アメリカ要因というのはけっこう大きいと思います。先ほどの留学の話だけでなく、いろいろなかたちでアメリカの映画の紹介などもありますし。アメリカに限らずフランスやドイツもあるしソビエトもあるし、という感じではありますが、やはり親米に近いのかもしれないなと思います。その点は気になっています。

川口 『われらの詩』について、今日は朝鮮戦争期の雑誌という側面を強調するかたちでお話したわけですが、同時に占領期の雑誌でもあるんですね。アメリカに占領されているという感覚があって、そこに朝鮮戦争が重なってくるというか…。『われらの詩』に即すると、そういう問題が出てくると思います。

玄善允 『われらの詩』における朝鮮人表象の問題についてですが、朝鮮人の表象がわりと出てくることは出てくるんですけども、でもシンパシーはまったくないですよ。ただ書き割りとして使っているだけという感じがとても強い。だから、のちの証言に朝鮮人が出てこないのもその延長だろうなど、僕には自然に感じられてしまいます。

川口 もともと向き合い方に問題があったと？

玄 そう。そういう感じがとても強いです。

司会(宇野田) 私は、『われらの詩』研究会で玄さんと一緒にテキストを読んできたのですが、玄さんが、峠が朝鮮人に言及した作品を読んで、「ナメとんのか！」という感想を漏らしておられたのをよく憶えています。『われらの詩』にかぎらず、当時のサークル詩誌における朝鮮人表象の定型性というのは、大きな問題ですね。

玄 失望というか、腹立ちのような感じがあること、それは確かなのですが、それはおそらく、現在から、しかも僕のように相当に歳をとった人間の感じ方であるということも考えておいたほうがよいかなど、思い返します。先に言ったように、僕から見てそのように思えるということはあくまで第一段階であり、それだけで済ますなら、現在からの歴史の裁断ということになりかねない。ですから、表象の問題はさておいても、少なくとも当時の状況やその中で生きていた人々の胸中に想像を巡らす必要があります。川口さんの発表

討論

では、当時、峠に共感して、峠の詩などを懸命に売りまわっていた在日朝鮮人がいたらしいのですが、その青年はどのように考えてそうしたのか。本当に感動したからそうしたのか。その感動の質というものはどのようなものであったのか。峠その他の人々の在日に対する共感のレベルなど関係なく、ともかく在日に一定の共感、あるいは関心を示してくれたのだから、それだけでも「嬉しい」ということがあったのかもしれない。それならなおさら、当時の在日青年の孤独、状況に対する危機意識、さらには、文学テキストの読解力もしくは知的レベルの貧困とその原因、そういったことにある程度、想像を働かさないといけないかな、と思ったりもするのです。

司会(宇野田) 時間がなくなってまいりましたので、最後に私のほうから少し発言させていただきます。

私は、以前に、在日朝鮮人サークル詩誌『ヂングレ』の復刻に関わりました。『ヂングレ』(1953～58年)というのは、政治的理由により大韓民国から逃れてきた金時鐘さんを中心として朝鮮戦争末期に立ちあげられ、休戦後の混乱期に詩誌として急成長し、国際秩序が安定化して左派在日朝鮮人運動団体が朝鮮民主主義人民共和国の直接的指導下に入ると“民族の主体性を喪失している”“民族虚無主義に陥っている”といった批判を浴びせられるようになって途絶してしまった、日本語詩誌です。この『ヂングレ』に視点を据えると、趣旨説明で述べたことの繰り返しになりますが、冷戦の分断線のすぐこちら側(反共独裁政権下の韓国や台湾)でも、冷戦の分断線のすぐあちら側(権威主義的な労働党／共産党政権下の朝鮮民主主義人民共和国や中華人民共和国)でも、自由な文化運動は不可能であったのに対し、米軍占領下／日米安保体制下の日本においてのみは反米反戦的な左翼文化運動が可能であった、という逆説が見えてくるように思います。戦後日本の文化運動、とくに朝鮮戦争前後の時期の文化運動には、冷戦の分断線の一步後方の権力のエア・ポケットだからこそありえた運動、という性格が、避けがたくあるように思います。

このことを強調しすぎると、戦後日本の社会運動全般を過小評価することにもなりかねないように思います。しかし、それでもいったんこのあたりのことを整理しないと、“東アジア冷戦／朝鮮戦争下の抑圧のもとでも勇敢に反米反戦の運動を展開した”というだけでは、歴史的評価としては説得性に欠けるのではないかと思います。ではどこに意味や可能性を見出すのか、という問いを念頭におきつつ、東アジア冷戦／朝鮮戦争下の日本の左翼文化運動を共時的に相対化するとともに通時的に文脈化することが必要ではないか、という点が、私にとっては、今回のセッションの出発点であると同時に到達点でもあります。

このような問い直しを始めていかないと、戦後文化運動研究の諸前提を共有していない人たちの目には、私たちはマニアックな資料発掘をやっているようにしか映らないのではないか、ということをして私としては危惧します。そのあたり、いかがですか？

討論

道場 これは言っておかないといけないのですが、最初に僕らが東京南部の研究を始めたときは、いまおっしゃったような問題を踏まえて出発したつもりです。単にこんなおもしろい人たちがいたというのではない結論を出したいということでいろいろ議論しているうちに、江島寛というサークル詩人を発見しました。東アジア冷戦体制が構築されてくる最中、朝鮮戦争という熱戦の最中に、自分たちの居場所から窓を開いて、東京にいる自分たちと朝鮮半島にいる人々とがつながる回路を模索する詩を書き得たサークル詩人がいたということが、一つの結論であったわけです。宇野田さんのお話を聞いていてたしかにそうだったなと思ったのですが、出発点は東アジア冷戦体制論で、そこからサークル研究に入って、サークル詩の世界に〈違う東アジア〉を構想する力がはまれていたことを見出すことができた段階で研究をまとめることができたと思っています。これが出発点であり、逆にいうと江島寛ほどの詩人がほかになかなか見つからないから非常にドメスティックな視点でマニアック化してしまっているということはあるかと思うのですが…。やはり初心というのは忘れてはいけませんね。

司会(宇野田) 私も同感です。下手をすると「このサークルは誰の担当」というような話になりかねない研究状況だと思うのですが、そこに落ち着いてしまうといけないので、初心に立ち返って、どうやって問題を提起していくか考える必要があるというのが、一つの結論になるかと思っています。みなさん今日は長時間ありがとうございました。

(みちば ちかのぶ 和光大学教員)

(たけうち えみこ 千葉工業大学教員)

(しん じよん 一橋大学大学院博士後期課程)

(ひょん そにゅん フランス文学研究者)